

# Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2018.3 vol.109

歴史を活かすまちづくり



江戸時代の面影を伝える四間道

【特集】

## 那古野界限 新たな文化を紡ぎだすまち

### Contents

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 【特集】 那古野界限<br>新たな文化を紡ぎだすまち | 1～3 |
| PERSON                     | 4   |
| なごやのまち今昔                   | 5   |
| 調査・研究                      | 6～7 |
| まちづくり活動支援                  | 8～9 |
| まちづくり来ぶらり                  | 10  |
| 活動報告                       | 11  |
| お知らせ                       | 12  |



四間道の伊藤家住宅（県指定文化財）

## 歴史を活かして新たな魅力あるまちづくり

名古屋駅から東に約1km、那古野界限には江戸時代以来の歴史と文化が息づく円頓寺、四間道などがあり、名古屋城にも程近い一帯です。かつては大須、大曾根と並び名古屋を代表する商店街として活気を見せていましたが、交通環境の変化などにより高度成長期を境に人の流れが変わり衰退し、空き店舗が目立つようになりました。しかし近年、地元の人々を中心に地域活性化の取り組みが活発になっています。個性的な店舗の誘致、まちづくり団体によるイベント、クラウドファンディングなどを利用した空き家の保存・活用など、地域の歴史を大切にしながら、新たな魅力づくりに取り組んでいる那古野界限のまちづくりに注目してみました。



## [特集] 那古野界限 新たな文化を紡ぎだすまち



江戸時代の四間道の様子(尾張名所図会より)



五条橋から見た円頓寺商店街(昭和初期)



明治時代建築の長屋を改修

### 交通網の発達により 名古屋屈指の商店街へ

那古野界限は、名古屋城築城のために開削された堀川が舟運を、東海道・宮宿と中山道・垂井宿を結んだ美濃路が陸路として、ヒト、モノの往来が盛んなところでした。また円頓寺などの寺院の門前町として、職人や商人が多く集まる町になりました。美濃路の一つ西側の通りは、「四間道」といい、商家の伊藤家住宅はじめ、戦災をまぬかれた建物や土蔵が残り、当時の面影を今に伝えています。なお「四間道」という名前の由来は諸説ありますが、江戸時代に大火があり類焼を防ぐためこの道を4間(約7m)に拡張整備したからだともいわれています。

明治時代には、東海道本線が開通、瀬戸電気鉄道(現在の名鉄瀬戸線)が、名古屋城の外堀を通り堀川駅まで延伸。やがて路面電車も次々開通し、那古野界限は交通至便なエリアとなりました。また西区則武新町には日本陶器(現在一部をノリタケの森として活用)や豊田自動織布(現在トヨタ産業技術記念館として活用)が工場を建設。西区新道、幅下には早くから菓子産業が集積し、ものづくり文化の息吹く地域となりました。

こうした周辺環境の大きな変化に伴い、五条橋から西へ延びる道筋に沿って商店、飲食店などの出店が相次ぎ、やがて活気のある商店街になっていきます。商店街はさらに名古屋駅方面へ延び、今日の円頓寺商店街に加え、西へ向かって円頓寺本町商店街、西円頓寺商店街が形成されていきました。

### 交通網の変化により商店街が衰退へ

その後、戦災という試練を乗り越え復興を遂げた那古野界限ですが、商店街は大きな転機を迎えます。1950年代、名古屋駅周辺に百貨店や商業ビルが次々に建設され、人の流れが移り始めました。そして1974年、市電が廃止され、1976年、名鉄瀬戸線の堀川駅が廃止。那古野界限の集客に大きな役割を果たしてきた両交通機関が姿を消します。また自家用車が普及し郊外に大規模なショッピングセンターなどが進出したことで、商店街で営業してきた店がシャッターを下ろし徐々に衰退していきました。

さらに菓子製造工場が郊外に移転し、菓子問屋街も人が一斗缶を背負って買い出しに来ていた時代から、工場から直接配送し、スーパーやコンビニなどで販売するようになったことで、人の流れが減少することになりました。

### 地域で取り組むまちづくり

2000年代に入ると、地域の中から再生への動きが始まります。2000年に職人、企業、商店街関係者など、まちづくり団体などの有志によって「ものづくり文化の道」検討部会を立ち上げ、職人の技

を間近に見学・体験できる「ものづくり文化の館」を開催するなど地域活性化や情報発信などに取り組んでいます。

2005年には地元商店主らが、円頓寺・四間道界隈をテーマにしたタウン誌「ポウ」を創刊。2007年のまちづくり団体「那古野下町衆」発足は、重要なターニングポイントとなりました。若手店主を中心に、コンサルタント、大学研究室、建築家、企業、クリエイターなど、多様なメンバーが参加するまちづくり集団です。「まちあるき」「安心安全」「空き家対策」「イベント」などをテーマに掲げ、議論を繰り返しながら多くのプロジェクトを立ち上げ、成果を上げています。

那古野下町衆<sup>なごやしちまちしゅう</sup>を母体として2009年に発足した建築家、若手店主、企業、コンサルタント等による集団「ナゴノダナバンク」は、空き家対策の実質的な担い手となり、昔からの町並みを残しながら、魅力ある店舗を誘致しています。

2011年、名古屋市は「都市計画マスタープラン」で、那古野界隈をまちづくり重点地区の一つと定めています。2012年に、地縁組

織、まちづくり団体などが参加し「四間道・那古野界隈まちづくり協議会」が発足しました。今まで個別に活動していた団体の連携を深めるとともに、地域の垣根を越えた活動を目指しています。理念として「名古屋のルーツを語り新たな文化を紡ぎ出すまち」を掲げ、それを実現するための取り組みとして「歴史・文化に根差した暮らしづくり」「堀川・円頓寺3商店街・菓子産業集積地のにぎわいづくり」「地域の拠点づくり」などを挙げています。2016年に「四間道・那古野界隈まちづくり構想」を作成し、地域の歴史にちなんだイベントや、四間道の歴史について紹介するかわら版を作成したり、伊藤家住宅で地場産業の展示を行うなど、にぎわいづくりのために活動しています。

(写真・画像協力／市原正人氏、四間道・那古野界隈まちづくり協議会事務局 浅野健氏)

## 名古屋市による 保存・活用の取り組み

名古屋市は1986年、四間道及び大船町周辺の約2.8haを「四間道町並み保存地区」に指定し、修理・修景に対する助成などを行っています。

四間道周辺は戦災の被害が比較적少なかったため、江戸時代、堀川の水運を利用して隆盛を誇った商人の土蔵や住宅が城下町の面影を残しています。大船町通沿いにある伊藤家住宅は清洲越の商家で、茶屋町の伊藤家（松坂屋）と区別して、川伊藤と呼ばれました。住宅は本家、新座敷、南座敷からなる主屋と、蔵、新土蔵、西蔵、細工蔵等からなり、堀川の水運を利用して家業を営んだ商家の屋敷の典型例として貴重な遺構となっています。



「円頓寺秋の祭り」でにぎわう円頓寺商店街



大正琴とミュージックベルによる演奏会(伊藤家住宅)